第四講　挿入句（『平家物語』　能登殿の最期）

★挿入句＝作者の意見・考えや疑問

〜、…疑問語…推量（連体形）、〜

〜、…にや、〜

〜、…にか、〜

（例）世に語り伝ふること、まことはあいなきにや、多くはみな虚言（そらごと）なり。

※文の出だしが挿入句になっている場合もある。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

〈読解練習〉

およそ（注）能登守教経（のとのかみのりつね）の矢先にまはる者こそなかりけれ。（注）矢だねのあるほど射尽くして、今日を最後とや思はれけん、赤地の錦（にしき）の直垂（ひたたれ）に、唐綾（からあや）（注）縅（をどし）の鎧着て、（注）いかものづくりの大太刀抜き、白柄（しらえ）の大長刀（なぎなた）の鞘をはづし、左右（さう）に持つてなぎ回り給ふに、面（おもて）を合はする者ぞなき。多くの者ども討たれにけり。

（注）新中納言、使者を立てて、「能登殿、いたう罪な作り給ひそ。さりとて、よき敵か。」とのたまひければ、「さては、（注）大将軍に組め（注）ごさんなれ。」と心得て、（注）打物（注）茎短（くきみじか）に取つて、源氏の舟に乗り移り乗り移り、をめき叫んで攻め戦ふ。

（注）能登守教経…平教経。平清盛の弟教盛の次男。
矢だね…「矢種」。手もとにある矢。
縅…鎧の鉄（または皮）で作った小さい板を糸などでつづったもの。
いかものづくり…太刀のこしらえが、いかめしく作ってあること。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

新中納言…平知盛。平家一門の武将。平清盛の四男。
大将軍…ここでは敵（源氏）の大将である「源義経（＝判官）」のこと。
ごさんなれ…「にこそあるなれ」の転。
打物…鉄を打って鍛えた武器。刀・長刀など。
茎短に…刀などの柄を、刀に近い方で握ること。敵に接近して確実に切り倒すための持ち方。

判官（はうぐわん）を見知り給はねば、物の具のよき武者をば判官かと目をかけて、馳せ回る。判官も先に心得て、おもてに立つやうにはしけれども、とかく違ひて能登殿には組まれず。されども、いかがしたりけん、判官の舟に乗り当たつて、あはやと目をかけて飛んでかかるに、判官かなはじとや思はれけん、長刀脇にかい挟み、味方の舟の二丈（注）ばかり退（の）いたりけるに、ゆらりと飛び乗り給ひぬ。能登殿は、早業や劣られたりけん、やがて続いても飛び給はず。今はかうと思はれければ、太刀、長刀海へ投げ入れ、甲（かぶと）も脱いで捨てられけり。

（注）丈…単位。一丈＝約三メートル。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

鎧の（注）草摺（くさずり）かなぐり捨て、胴ばかり着て（注）大童（おほわらは）になり、大手を広げて立たれたり。およそ（注）あたりをはらつてぞ見えたりける。恐ろしなんどもおろかなり。能登殿大音声（だいおんじやう）を上げて、「我と思はん者どもは、寄つて教経に組んで生け捕りにせよ。鎌倉へ下つて、頼朝に会うて、ものひとこと言はんと思ふぞ。寄れや寄れ。」とのたまへども、寄る者一人（いちにん）もなかりけり。

（注）草摺…鎧の胴のすそに垂らして、腰から下をおおう部分。
大童…髪を束ねずばらばらのまま垂らしたざんばら髪。乱れ髪で奮戦するさまにいうことが多い。
あたりをはらつて…周囲を圧倒して。

●おろかなり【疎かなり・愚かなり】

❶・いいかげんだ

❷未熟だ・劣る

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

●いふもおろかなり　【言ふもおろかなり】

❶言っても言い尽くせない・言うまでもない

同

~もおろかなり

いへばおろかなり【言へばおろかなり】

いふべきかたなし【言ふべき方無し】　＊かた＝方法

いふべきにもあらず【言ふべきにも有らず】

いふべくもあらず【言ふべくも有らず】

いふばかりなし【言ふばかり無し】

●いへばさらなり【言へば更なり】

❶今さら言うまでもない・もちろんのことだ

同

いふもさらなり【言ふも更なり】

さらなり【更なり】

さらにもいはず【更にも言はず】

さらにもあらず【更にもあらず】

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

ここに、土佐の国の住人、（注）安芸郷（あきがう）を知行しける安芸（注）大領（だいりやう）実康（さねやす）が子に、安芸太郎実光（さねみつ）とて、三十人が力持つたる大力（だいぢから）の剛（かう）の者あり。我にちつとも劣らぬ郎等（らうどう）一人、弟（おとと）の次郎も普通には優れたるしたたか者なり。安芸太郎、能登殿を見（注）たてまつて申しけるは、「いかに猛（たけ）うましますとも、我ら三人取りついたらんに、たとひ丈（たけ）十丈の鬼なりとも、などか従へざるべき。」とて、主従三人小舟に乗つて、能登殿の舟に押し並べ、「えい。」と言ひて乗り移り、甲の（注）錏（しころ）をかたぶけ、太刀を抜いて、一面に討つてかかる。

（注）安芸郷…土佐の国の郷の名前。現在の高知県安芸市のあたり。
大領…長官。
たてまつて…「たてまつりて」の促音便「たてまつつて」のつづまった形。
錏…兜の鉢の左右と後ろにたれて、首の部分を覆うもの。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

能登殿ちつとも騒ぎ給はず、真つ先に進んだる安芸太郎が郎等を、裾を合はせて、海へ（注）どうど蹴入れ給ふ。続いて寄る安芸太郎を、弓手（ゆんで）の脇に取つて挟み、弟の次郎をば馬手（めて）の脇にかい挟み、ひと紋め紋めて、「いざ（注）うれ、さらばおのれら死出の山の供せよ。」とて、生年（しやうねん）二十六にて海へ（注）つつとぞ入り給ふ。

（『平家物語』）

（注）どうど…どっと。どすんと。
うれ…身分の低い者を呼ぶときに使う。きさま。おまえら。
つつと…すっと。

●弓手＝弓を持つほうの手⬇「　　　　」

●馬手＝馬の手綱（たづな）を持つほうの手⬇「　　　　」

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

★**『平家物語』**
ジャンル…**軍記物語**
成立…**鎌倉前期**成立。

●**平家一門の繁栄と滅亡**を描いたもの。**仏教的無常観**。

●〈冒頭文〉
「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。娑羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。おごれる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし。猛き者も遂には滅びぬ、ひとへに風の前の塵に同じ。」

祇園精舎の鐘の音は、すべてのものは流転して永遠などありえないという響きがある。娑羅双樹の花の色は、盛んなものは必ず衰えるという道理を表している。奢りたかぶっている人も長くは続かない、まるでまさに（短い）春の夜の夢のようである。勢いの盛んな者も結局は滅びてしまう、まったく（すぐに吹き飛ばされてしまう）風の前の塵と同じようなものである。
※祇園…インドにある僧院。
　精舎…僧の宿舎。
　娑羅…樹木の名前。

●「**平曲**」＝**盲目の琵琶法師**が琵琶に合わせて『平家物語』を語った音曲。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第四講　復習問題

①「泣きかなしむといへばおろかなりや」の現代語訳として最も適当なものを、次の中から選べ。

ア　泣き悲しむといってもそれはあまりにも大げさだ。
イ　ことばでは言いようもないほどに泣き悲しむのであった。
ウ　今になって泣き悲しんでもそれは無駄なことであった。
エ　仏教の立場からすれば人の死を悲しむのは愚かなことだった。
オ　女房が身分の高い女御の死を悼むのは慎むべきことであった。

②「こともおろかなり」の解釈として最も適当なものを、次の中から選べ。

ア　言うまでもないことだ
イ　事前の準備が不十分なことだ
ウ　この上なく無知なことだ
エ　どうにも不都合なことだ
オ　特に思慮が足りないことだ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

③「いへばさらなり」の現代語訳として最も適当なものを、次の中から選べ。

ア　もとより言うまでもない
イ　取るに足らないことだ
ウ　言葉にすれば嘘になる
エ　どうにでもなることだ

④『平家物語』のジャンルは何か。最も適当なものを、次の中から選べ。

ア　歌物語
イ　伝奇物語
ウ　説話
エ　軍記物語
オ　歴史物語

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第四講

〔現代語訳〕

能登守教経の矢の正面に立ちはだかる者はまったくいなかった。（教経は）手もとにある矢のあるだけを射尽くして、今日を最後とお思いになったのだろうか、赤地の錦の直垂に、唐綾縅の鎧を着て、いかめしく作っている大太刀を抜き、白木の柄の大長刀の鞘をはずし、（太刀と長刀を）左右の手に持ってなぎ倒し回りなさると、面と向かって相手になる者はいない。（源氏の側で）多くの者たちが（能登殿に）討たれてしまった。新中納言〔＝平知盛〕が、使者をつかわして、「能登殿よ、あまり罪を作りなさるな。そんなことをしたからといって（あなたにふさわしい）立派な敵か。」とおっしゃったので、「それでは、大将軍〔＝源義経〕と組み討ちせよということだな。」と悟って、武器の柄を短めに持って、源氏の舟に次々に乗り移り、わめき叫んで攻め戦う。（しかし、能登殿は）判官〔＝源義経〕の顔を見知っていらっしゃらないので、武具の立派な武者を判官かと目をつけて、駆け回る。判官も前もって気づいていて、（能登殿の）正面に立つようにはしていたが、あちこちと行き違って能登殿と組みなさらない。けれども、どうしたのだろうか、（能登殿が）判官の舟に乗り当たって、「それっ。」と（判官を）めがけて飛びかかると、判官はかなうまいとお思いになったのだろうか、長刀を脇に挟み、味方の舟で二丈ほども離れていた舟に、ひらりと飛び乗りなさった。能登殿は、早業は劣っていらっしゃったのだろうか、すぐに続いて飛び移りなさらない。（能登殿は）今はこれまでとお思いになったので、太刀、長刀を海へ投げ入れ、甲も脱いでお捨てになった。鎧の草摺も引きちぎって捨て、（鎧の）胴だけを着てざんばら髪になり、大きく手を広げて立ちなさった。おおかた周囲を圧倒する様子に見えた。恐ろしいなどという言葉ではとても言い尽くせない。能登殿は大声をあげて、「我こそはと思う者たちは、近寄ってこの教経に組んで生け捕りにせよ。鎌倉へ下って、頼朝に会って、ひとこと言おうと思う。寄れ、寄れ。」とおっしゃるけれども、近寄る者は一人もいなかった。

さて、土佐の国の住人で、安芸郷を支配していた安芸大領実康の子に、安芸太郎実光といって、三十人分の力を持っている大力の剛の者がいた。（実光には）自分に少しも劣らない家来が一人（おり）、弟の次郎も人並みよりは優れている剛の者である。安芸太郎が、能登殿を拝見して申し上げたことには、「どんなに勇猛でいらっしゃるとしても、我ら三人が取り組んだなら、た

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

とえ背丈が十丈の鬼であっても、どうして組み伏せられないことがあろうか。（いや、組み伏せる。）」と言って、主従三人が小舟に乗って、能登殿の舟に押し並べ、「えい。」と言って乗り移り、甲の錣を傾け、太刀を抜いて、三人並んでいっせいに討ちかかる。能登殿は少しも騒ぎなさらず、真っ先に進んだ安芸太郎の家来を、裾が合うほど近づいて、海へどすんと蹴り入れなさる。続いて寄ってくる安芸太郎を、左手の脇に抱えて挟み、弟の次郎を右手の脇に挟み、ひと締め締めつけて、「さあきさまら、それならばおまえたちは死出の山の供をせよ。」と言って、生年二十六歳で海へすっと入りなさった。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　第四講　解答解説

〔解説〕

①「いへばおろかなり」は「言っても言い尽くせない」という意味。したがって、「言っても言い尽くせないほど泣き悲しむ」ということ。よって、正解はイ。

②「〜もおろかなり」も①同様に「言っても言い尽くせない・言うまでもない」という意味。よって、正解はア。

③「いへばさらなり」は「今さら言うまでもない・もちろんのことだ」の意味。よって、正解はア。

④『平家物語』のジャンルは「軍記物語」。よって、正解はエ。

〔解答〕

①イ　②ア　③ア　④エ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。